「CHAIN」

―２稿―

2026/04/20

山極 瞭一朗

〈人物表〉

鈴木（すずき） 克洋（かつひろ）	（17）	高校生
澤田（さわだ） 勝美（かつみ）	（17）	克洋の双子の弟
呉（くれ） まりも	（17）	克洋の恋人
五木田（ごきた） 凛子（りんこ）	（28）	克洋の担任教師
鈴木（すずき） 亜沙美（あさみ）	（53）	克洋の母
鈴木（すずき） 正克（まさかつ）	（56）	克洋の父

1.　（回想）鈴木家・玄関・外（夕）

土砂降りの雨。

豪勢な一軒家。

鈴木勝美（４）、いかにも柄の悪そうな男女に挟まれ、鈴木家を背に歩いていく。

鈴木克洋（４）、玄関から飛び出してくる。

克洋「勝美」

と、腕を取ろうとするが、両親である鈴木亜沙美（３９）と鈴木正克（４２）に制止される。

勝美、振り向き、克洋をじっと見つめる。

克洋、手を伸ばす。

が、勝美は何も言わずに目をそらし、そのまま去る。

克洋、すとんと腕を落とす。

2.　鈴木家・克洋の部屋（朝）

克洋（１７）、ハッとして目を覚ます。身体は汗でぐっしょりと濡れている。

室内には、陸上短距離走の表彰状やトロフィーが多数。「関東大会」「優勝」の文字が記されている。

克洋、大きく息をつき、手で汗を拭う。

3.　鈴木家・リビング（朝）

高級家具で揃えられただだっ広い豪奢な空間。

正克（５６）を中心に、亜沙美（５３）と克洋が向かい合わせに座っている。

食事中。ナイフとフォークのこすれ合う音だけが響いている。

メイン料理はアクアパッツァである。

克洋、窺うように正克に視線を送り、

克洋　「また勝美の夢を見た」

正克　「食事中だ」

克洋　「父さんが捨てた――」

亜沙美、遮って、

亜沙美「克洋」

克洋　「今どこにいる？」
正克　「くだらん」
克洋　「ねえ、父さん、どうしてあのとき――」
亜沙美、克洋を再び遮り、声を荒げて、
亜沙美「やめなさい」
克洋、頬を歪めて、亜沙美を睨む。ため息をつくと、
ナイフを置く。そそくさと部屋を出ていく。
正克、ふんと鼻を鳴らし、食事を続ける。
克洋のアクアパッツァは手つかずだ。

4.　**高校・正門・中（朝）**

制服姿の高校生たちが、門をくぐる。
その中に、他校の制服を着た澤田勝美（１７）、門
をくぐると足を止める。
そして、グラウンドを見て、ニヤリと笑う。

5.　**高校・グラウンド（朝）**

短距離走４００ｍ。克洋、全速力で走っている。
白線を超える。
近くにいた呉まりも（１７）、ストップウォッチを
止める。
克洋、さっと汗を拭い、
「タイムは？」
まりも、微笑んで、ストップウォッチを見せる。
まりも「自己ベスト更新、すごいじゃん」
克洋、嬉しそうにガッツポーズ。
まりも「準備万端じゃない？」
克洋　「慢心はできない」
まりも「もっと喜びなよ」
克洋　「どれだけ準備しても、しすぎってことはない。陸上もテ
ストも」
まりも「学年トップが言うと嫌味だからね」
克洋はまりもと顔を見合わせて笑う。
すると、勝美がやって来て、

勝美　「ひとつ勝負いいですか？」
克洋とまりも、不思議そうに勝美を見つめる。
まりも「転校生ですか？」
勝美　「俺、走るの速くて。勝負しましょうよ」
克洋、まりもと顔を見合わせる。
×　×　×
スタートライン。
克洋、入念にストレッチをしている。
勝美はどことなくへらへらしており、克洋を見て、
ふっと笑みをこぼす。
まりも「位置について」
さっと体制を整える克洋。
棒立ちの勝美。
まりも「よーい、ドン」
と、ストップウォッチを押す。
同時に走り出す克洋と勝美。
一進一退の攻防。
克洋、頬を歪める。
勝美は余裕なようで……
最終コーナー。勝美、体力を温存していたのか、急
にスピードを上げる。
ハッとする克洋、必死に食らいつくが、敵わない。
勝美が先にゴールする。
まりも、ストップウォッチを止める。
まりも「え、嘘……」
遅れて、克洋もゴール。
勝美　「いやあ、速いっすね。克洋さん」
克洋　「……」
克洋、じりっと頬を歪める。額を一筋の汗が伝う。

6.　**高校・外観（朝）**

チャイムが鳴る。

7.　高校・教室（朝）

生徒たちは軽口をたたきながら教壇に注目している。
担任の五木田凛子（２８）、黒板に「澤田勝美」と書く。
勝美はにこにこしながら生徒たちに対面している。
が、隅の席、克洋を認めると、薄く口角を上げる。
克洋、勝美を真っ直ぐに見つめている。流れる汗をさっと拭う。
凛子、生徒たちに向き直って、

凛子　「今日からこのクラスに転校してきた澤田勝美くんです」
勝美　「澤田です。誕生日は９月２３日」
まりも「克洋と一緒なんだ」
克洋、咄嗟に笑みを作ろうとするが、ぎこちなく、
克洋　「お、おう」
まりも「反応薄っ」
勝美　「好きな食べ物はアクアパッツァ」
ぐっと顔を硬直させる克洋。
勝美　「って言っても、片手で数えられるくらいしか食べたことないけど」
笑いが起きる。
勝美　「卒業まで1年もないけど、よろしくお願いします」
生徒たちは拍手する。
凛子　「席はあそこね」
勝美は一礼すると、克洋の隣の席に来る。
勝美　「はじめまして、澤田です。よろしく」
克洋、上目遣いに勝美を見つめる。
勝美、ふっと笑みをこぼし、克洋に顔を近づける。
克洋にしか聞こえないくらいの小声で、
澤田　「いや、久しぶりか」
と、手を差し出す。
克洋、逡巡して、その手を握る。

8.　河川敷（夕）

どんよりとした雲行き。

克洋とまりも、横並びで歩いている。
ゼロ距離。手が触れ合うか触れ合わないか。
克洋、心ここにあらずといった様子。
まりもは克洋の横顔を一瞥し、さっと手を取る。
克洋、ハッとして、
克洋「ああ、ごめん」
まりも「気にしてる？」
克洋「何が？」
まりも「朝練」
克洋、ふっと笑みをこぼし、まりもの手を握って、
克洋「そんなんじゃないよ」
まりも「ほんと？」
克洋「ああ、いや……」
まりも「うん」
克洋「……ごめん、嘘」
まりも、にっこりと笑って、
まりも「大丈夫だよ、気にしなくて」
克洋「……いや」
まりも「ん？」
克洋「そうじゃないんだ」
まりも、不思議そうに克洋を見る。
克洋、思わず足を止める。掴んだ手を離す。
向こうから、勝美が歩いてくる。
克洋「勝美……」
まりもも勝美に気付き、
まりも「澤田くん」
勝美、克洋とまりもの前に立ちはだかって、
勝美「ずっと会いたかった」
克洋「……俺だって」
勝美「よく言うよ」
克洋「この１４年――」
勝美、遮って、
勝美「もう、昔のようには戻れないさ」
まりも「……ねえ、２人って」

克洋　「……兄弟なんだ」

まりも、ハッとして、息を呑む。

勝美　「久しぶりだね、兄さん」

克洋　「勝美……」

勝美　「俺は全てを失った」

と、克洋に顔を近づけ、耳元で、

勝美　「次は兄さんの番だ」

克洋、呆然として立ちすくむ。

どこかで雷鳴が轟く。

（おわり）